

# 通過儀礼に着目した授業実践

—中学生のきものに対する意識に及ぼす影響—

扇澤 美千子	茨城キリスト教大学生生活科学部
川端 博子	埼玉大学教育学部生活創造専修家庭科
長崎 翔子	埼玉大学教育学部家政教育講座
石川 敦子	さいたま市立土合中学校
伊藤 大河	学習院大学計算機センター
阿部 栄子	大妻女子大学家政学部
薩本 弥生	横浜国立大学教育人間科学部

キーワード：通過儀礼 きものに対する意識 公立中学校 伝統文化 ゆかたの着装

## 1. はじめに

平成19年に公布された学校教育法を受け、平成20年度中学校学習指導要領技術・家庭科の家庭分野・被服領域において「和服の基本的な着装を扱うこともできる」が明記された<sup>1)</sup>。衣生活の文化やゆかたの着装を扱う授業事例<sup>2)-3)</sup>、薩本らが行なってきた「きもの文化の伝承と発展のための教育プログラムの開発」のプロジェクト研究<sup>4)-6)</sup>など成果が少しずつ蓄積されている。しかし、きものを扱う授業を実施するためには、教材（ゆかたや帯、きものなどの実物、プリント資料）の準備・着付けの指導法・時間数やTAの確保等の授業運営上の問題や、生活に生かす視点からのアプローチが難しいといった内容面の問題等、課題が残されている。そこで著者らはきものの良さを味わう教育プログラムとして生活と伝統文化への関連づけを意図し、通過儀礼に着目した公立中学校での授業を実施した。ゆかたの着装にとどまらないきものの良さを味わわせる授業内容の提案を行い、実物展示が難しい場合やきもの文化・知識について専門家に説明してもらう場合を想定し、ICT（情報通信技術）活用を検討<sup>7)</sup>した。本研究では、その際、授業内で収集した調査結果をもとに、授業を通して生徒のきものに対する知識・興味関心がどのように変化したか、また、きものを身近な存在として感じさせることができたかを考察する。

## 2. 研究方法

### 2-1 実践授業の対象と形態

埼玉県さいたま市の公立中学校の協力を得て、授業は1年生8クラス312名（男子181名、女子131名）を対象に、平成26年6月から7月に実施した。授業時間は50分・3時間構成とした。場所は被服室で家庭科教諭とTAの2名体制で行った。TAの関与はゆかた着装師範と着実習補助のみにとどめた。

## 2-2 授業の流れ（詳細は別稿<sup>7)</sup>で報告）

### [1時間目]

- ①前時の刺し子の学習に関連させ、麻の葉やさや形等の伝統的文様について説明する
- ②通過儀礼として「七五三」「成人式」「結婚式」の意味とその時に着用するきものについて、実物とスライドで解説する
- ③班に1枚ずつゆかたを配付し、羽織ったり畳んだりしながら、きものの形、着装法の特徴を考えさせる
- ④教師がゆかたの正しいたたみ方を示範した後、ゆかたをたたむ練習をする

### [2・3時間目]

- ①教師とTAが男女のゆかたの着付けを示範して、男物と女物の着方や形の違いを学習する
- ②男女別に2～3人のグループとなり、モデルと着付ける生徒を決定する
- ③モデルの身長に合うゆかたを配付し、帯はコーディネートさせ着装実習を行う
- ④ゆかたを片付けた後、2クラスでは、タブレットPCを使用して、大学の研究室または結婚式場と20分程度中継し、結婚式の衣装について解説してもらう。6クラスでは教師が実物を用いて結婚式のきものの種類や用途について説明する
- ⑤きものに用いられる文様や柄、四季の色や和菓子等の身近な日本文化をスライドで紹介し、きものの良さについて記述させる

## 2-3 調査項目

以下に記載する事前調査、ワークシートおよび事後調査を作成し、授業評価及び生徒のきものに対する意識の変化について検討した。

### (1) 事前調査

授業開始前、生徒のきものとの関わりの実態や、きものに対する知識・興味関心等の把握を目的とする事前調査を行った。質問項目は、きものの着用経験、きもの着用に対する意識、きものへの興味関心（着付け、色柄、きものと帯の組み合わせ、帯結びのアレンジ、流行、歴史、TPO、通過儀礼で着るきもの）、きもののイメージ・知識（自由記述）である。内容の一部は、平成23年の川端らの実践<sup>5)</sup>を参考にして作成した。

### (2) ワークシート作成

授業中に記載させたワークシート①（1時間目用）では、授業で学んだことをふまえて、きもの良さを自由記述で記入させた。

ワークシート②（2・3時間目用）は、ゆかたの着装実習の感想ときもの良さを自由記述で記入させた。（モデルの生徒と着付けた生徒、中継の有無により4種類作成した。）

### (3) 事後調査

夏休みあけ9月に、授業に対する意識やきものに対する知識・興味関心の変化等を見ることを目的とした事後調査を行った。質問項目は授業の中で最も印象に残っている内容、きもの着用に対する意識（事前調査と同一）、きものへの興味関心（事前調査と同一）、伝統文化に対する考えである。

## 2-4 分析方法

質問の回答は、基礎統計量と回答割合の集計で全体的な傾向を把握した。解析ソフトには、

SPSS Statistics23を使用した。また、自由記述についてはキーワードを抽出し、分類・集計した。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 生徒の実態

生徒のこれまでのきものの着用場面は男女ともに「七五三」が最も多く、男子は約半数（83名）、女子は約9割（101名）の生徒が七五三できものを着用していた。また、ゆかたに関しては「お祭り」（男41名、女79名）「温泉」（男73名、女56名）「花火大会」（男20名、女47名）等着用する機会が多いが、ゆかた以外のきものに関しては、七五三、お正月（17名）以外の着用場面はほとんどなかった。

きものについてのイメージや知っていることについての自由記述では、『着用場面・場所』144件〔行事（祭り・花火大会等）40件、場所（京都・旅館等）39件、通過儀礼（成人式・七五三等）38件他〕と『伝統・歴史』144件〔伝統（昔・伝統衣装等）50件、日本（和・日本文化等）48件他〕の記述が多く、次いで『印象』98件の記述からは、女性のきものを連想する傾向があること、また、きもの特徴のひとつである色柄に関する印象が強いことが伺えた。『祝福』に関する記述は61件で生徒にとってきものは祝い事の際に着用する特別な衣装のようである。『マイナス面』72件では「着るのが難しい」の記述が18件と最も多く、次いで「高級」14件、「動きにくい」9件、「暑い」「重い」8件、「きつい」7件他となった。生徒たちは着付けやきものの価格、動きにくい・暑い等の機能面に対し、マイナスのイメージを抱いていることが分かった。記述件数や内容の傾向に男女差は少なかった。

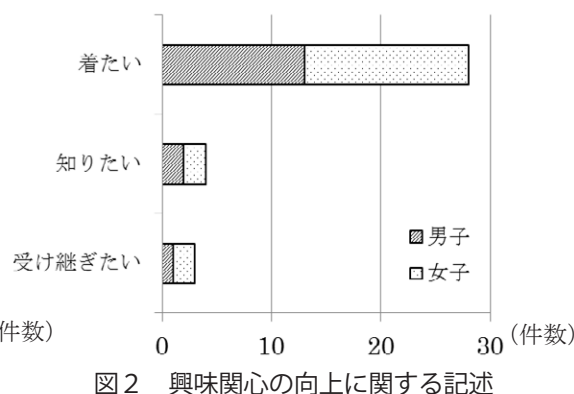
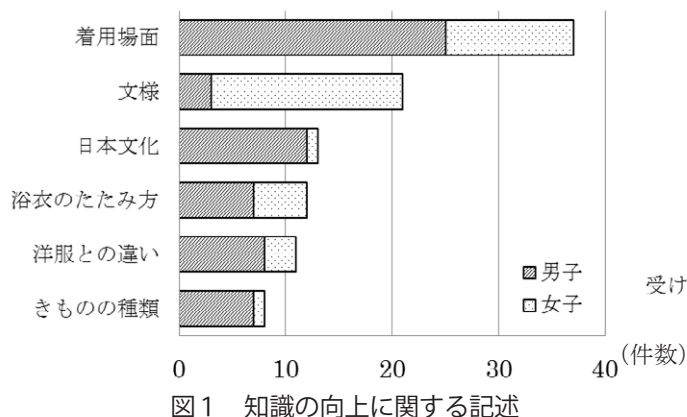
#### 3-2 知識・興味関心の向上

1時間目終了時のワークシート①「今日の授業で学んだことから、『きものの良さ』を見つけて書いてみよう」に対する記述から、その内容を「知識の向上（～が分かった）」「興味関心の向上（～したい）」に分類し、結果を図1、図2に示した。

「知識の向上」に関する記述102件（図1）では『着用場面』に関する記述が37件と最も多かった。記述内容としては、「人生の節目で着ることが分かった」「いろいろな行事で着られることが分かった」など、自分の過去の着用経験もふまえ、成人式や結婚式など様々なきものの着用場面があることを知ることができた。次いで『文様』に関する記述は21件で、前時で取り組んだ刺し子学習や普段あまり馴染みのない古典的な文様であってもその意味も一緒に提示することでより分かりやすい学習内容となり、知識の向上につながった。さらに、『日本文化』に関する記述が13件、『ゆかたのたたみ方』に関する記述は12件でゆかたの収納面や正しいたたみ方があることの利便性をとらえていた。次いで『洋服との違い（形が決まっている・帯やひもがボタンのかわりをしている等）』が11件『きものの種類（たくさん種類がある等）』が8件となった。

「興味関心の向上」に関する記述35件（図2）では『（きものを）着たい』といった記述が28件と最も多く、通過儀礼の中では、生徒にとって近い将来に来る「成人式」できものの着用を楽しみにしている様子が伺えた。次いで『知りたい（ゆかたのたたみ方等）』が4件、『受け継ぎたい』が3件となった。

1時間目の学習活動と照らし合わせてみると、学習活動を通して生徒たちにきものの知識を教授できたことがわかる。しかし、今回の授業で着目していた「通過儀礼」に関しては、きものは「七



五三・成人式・結婚式で着るもの」という着用場面の知識にとどまり、式の意味や、年齢・男女等により異なるきものの種類まで言及している生徒はいなかった。

### 3-3 授業に対する意識

きものの良さを味わう教育プログラムの提案<sup>7)</sup>で報告したように、中継授業は実物がなくても知識を深める方法として有効であった。調査回答やワークシートの記述には中継の有無による差は見られなかったため、以後の解析は全データを使用した。

授業の中で最も印象に残っている内容について記述した件数（事後調査）を学習活動順に集計した（表1）。最も記述が多かったのは「2・3時間目／① ゆかたの着装」に関する回答193件で、先行研究と同様、着装体験は生徒たちに最も印象的なことがわかる。女子は「カラーコーディネート」（着装実習時のゆかたに合う帯選び）を挙げている生徒が多く、次いで「1時間目／文様」に関する回答が54件であった。文様に関しては、1時間目の導入：刺し子についての前時の復習、きもの実物やスライド資料、文様1つ1つに意味が込められている事の学習が生徒たちにとっては新たな発見であり、印象深かったことが伺われる。「1時間目／① 七五三・成人式・結婚式で着用するきもの」に関する回答は23件で、その後の授業で実物やスライド資料を多用し視覚的に分かりやすくしたことや、中学生にも馴染みのある着用場면을提示したことによる効果といえよう。

表1 「きもの」の授業の中で、一番印象に残っていることは何ですか？に対する回答

	学習活動		男子 (件)	女子 (件)	計 (件)
		導入	文様	27	27
1時間目	① 七五三・成人式・結婚式で着用するきもの	着用場面	4	5	9
		種類	4	6	10
		七五三・成人式・結婚式	3	1	4
	② きものと洋服の違い	洋服との違い	0	1	1
		色柄による印象の変化	5	2	7
		ゆかたのたたみ方	5	3	8
2・3時間目	① ゆかたの着装	カラーコーディネート	1	14	15
		ゆかたの着装実習	93	69	162
		帯結びのアレンジ	7	9	16
	② 中継授業	中継授業	4	2	6
	まとめ	日本文化	1	0	1

### 3-4 ゆかた着実習に対する感想

ゆかたの着実習に対する感想（ワークシート②）を『着装時の気持ち・印象』『難易度・出来栄え・理解』『着装後の気持ち』『着実習の形態』『伝統文化』の5つの観点別に分類し、表2に示した。

ゆかた『着装時の気持ち・印象』に関する記述233件では「嬉しかった」「楽しかった」「気持ち引き締まった」など記述内容は全て肯定的なもので、男子に比べ女子の方がゆかた着装時に楽しさや高揚感を感じていた。着付けの『難易度・出来栄え・理解』に関する記述187件では「難しい（大変・複雑等）」の記述が150件で、男女ともに「帯」の記述が最も多く、着付けの手順の中でも帯結びについて難しさを感じていた。また、女子のゆかたに関してはあらかじめ揚げをしたため「おはしょり」に関する記述は見られなかった。

ゆかた『着装後の気持ち』に関する記述103件は「意欲」38件、「発見」30件、「満足感」25件、「向上心」10件であった。意欲に関しては「夏祭り（で着たい）」「色柄（〇〇色のゆかたを着たい・自分に似合う色柄のゆかたを着たい）」等が多く、発見に関する記述では「(着付けが) 難しい」の記述が18件、向上心に関する記述では「1人で着たい」「(着付けを) 覚えたい」「きれいに着たい」等となった。

『着実習の形態』58件についてはゆかたと帯の「組み合わせ」に関する記述が19件と最も多かった。また、授業がグループ学習であったことから、「友人との関わり（手伝ってもらわないと難しかった・協力できてよかった等）」の記述が15件となり、友人と関わり合いながら学ぶことは有意義だったが、「着ることが出来ず残念だった」といった記述もみられ、グループ学習や時間的制約等の課題点が示された。『伝統文化』32件について、「(毎日着付けをしていて) 大変」「知恵(がすごい)」等、ゆかたを着てみて洋服に比べ着付けが難しく、きものを毎日着用していた昔頃の大変さを実感していた。さらに、「日本文化」の記述が11件、「伝統」が7件となり、日本らしさや歴史の重みを感じていた。

表2 ゆかたの着実習に対する感想

分類		男子 (件)	女子 (件)	計 (件)
着装時の気持ち・印象	気持ち	26	56	82
	機能性	63	47	110
	印象	13	28	41
難易度・出来栄え・理解	難易度	88	67	155
	出来栄え	8	6	14
	理解	10	8	18
着装後の気持ち	満足感	9	16	25
	発見	13	17	30
	向上心	5	5	10
	意欲	20	18	38
着実習の形態	カラーコーディネート	12	20	32
	グループ学習	7	19	26
伝統文化	昔を思う	9	5	14
	和を感じる	14	4	18

### 3-5 きものの着用に対する意欲

#### (1) ゆかたの着用に対する意欲（事前調査と事後調査の比較）

「お祭りや花火大会などで、ゆかたを着たいと思いますか？」の質問に対する事前調査とゆかたの着装実習直後（ワークシート②）の回答を比較した（図3）。男子は、事前調査では「思わない」129名（71%）の回答が「思う」18名（10%）を大きく上回っていたが、ワークシート②では85名（47%）が「思う」と回答した。一方、女子も「思う」の回答が93名（71%）と、事前調査の60名（46%）から大きく増加した。ワークシート②において「思う」と回答した理由としては、男女ともに『季節感』に関する記述54件が最も多く、次いで『行事』46件、『気持ちの変化』36件、『印象の変化』29件であった。「思わない」と回答した理由としては、『機能性の低さ』36件や『着付けの難しさ』19件が挙げられた。

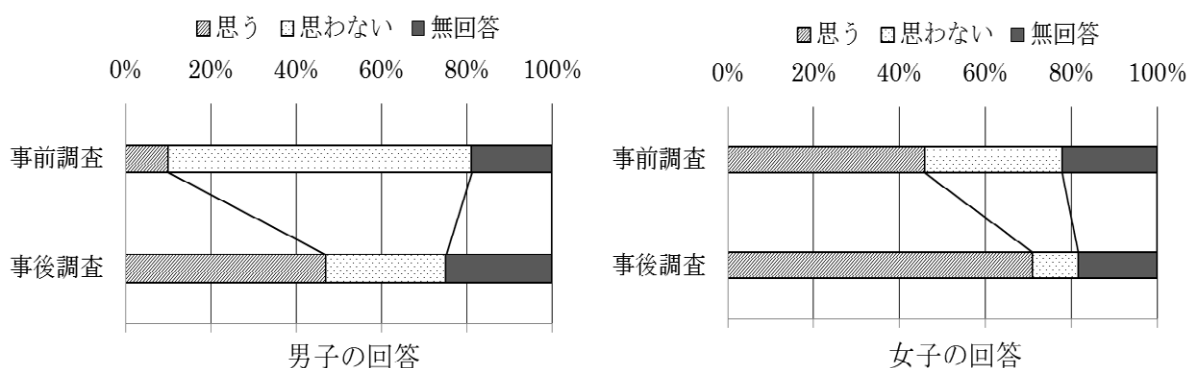


図3 お祭りや花火大会などで、ゆかたを着たいと思いますか？ 事前・事後調査の比較

#### (2) 「成人式」「結婚式」でのきものの着用に対する意識（事前調査と事後調査の比較）

成人式で着てみたい衣装についての複数回答可で尋ねた事前・事後調査の結果を比較した。男子は「スーツ」の回答が高いものの、事後調査では「紋付羽織袴」を約4割の生徒が選択した。女子は事前調査時にも「振袖」の人気の高さが目立っていたが、事後調査ではさらに増加し9割に近い生徒が「振袖」を回答した。男子は「スーツ」と回答した理由として『印象』に関する記述（「きちりしている」「かっこいい」等）、「紋付羽織袴」を回答した理由としては、『日本文化』『印象』『気持ち』『祝福』等の記述があり、記述件数はいずれも事前調査を上回っていた。女子は「振袖」と回答した理由として、「一生に一回」「人生の節目」といった『祝福』に関する記述が多く、積極的な理由で選択している気持ちの変化が伺えた。

次に、結婚式で着てみたい衣装について事前・事後調査の結果を比較すると、男子は「タキシード」、女子は「ウエディングドレス」の回答が高いものの、事後調査では男女ともに「きもの」の回答割合が高まった。また、「タキシード」と「きもの」、「ウエディングドレス」と「きもの」というように洋装と和装の両方を着用したいと回答する生徒が男女とも増えており、「きもの」と回答した理由としては、『日本文化』や『祝福』に関する記述が増加した。授業を通して、きものは日本独自の伝統衣装という認識が強められたことがわかる。授業を通して成人式・結婚式の際に着用するきものについての知識を得たことにより、「紋付羽織袴」「振袖」「白無垢」がどのようなものであるかを理解したこと、そして実物や実際に着用している写真を見たことで、きもの着用に対し生徒の「自分も着てみたい」という肯定的な気持ちの変化がみられた。

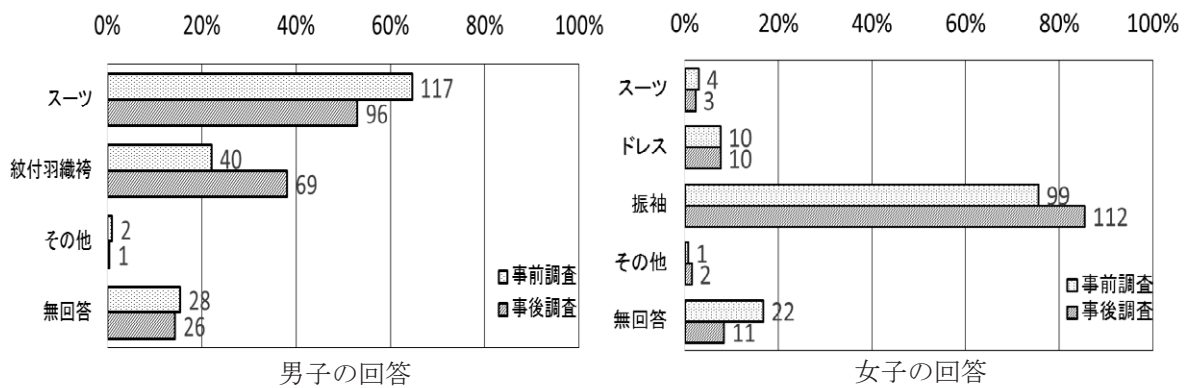


図4 成人式（20才の時）で、どんな衣装を着たいと思いますか？ 事前・事後調査の比較

### 3-6 きものへの興味関心（事前調査と事後調査の比較）

きものについて、興味関心に関する8項目（着付け、色柄、きものと帯の組み合わせ、帯結びのアレンジ、流行、歴史、TPO、通過儀礼で着るきもの）を5段階評価した事前・事後調査の結果を比較すると、ゆかたの着装前後の調査を比較した川端ら<sup>6)</sup>の結果と同様に、事後調査では男女ともに、全ての項目で興味関心が高まり、男子は全項目において事前調査と事後調査の間に対応のあるt検定より有意な差 (\*\* $p < 0.01$ ) がみられた。女子は「着付け」「帯結びのアレンジ」「流行」「歴史」の4項目において\*\* $p < 0.01$ で、「きものと帯の組み合わせ」の1項目において\* $p < 0.05$ で、有意な差がみられた。

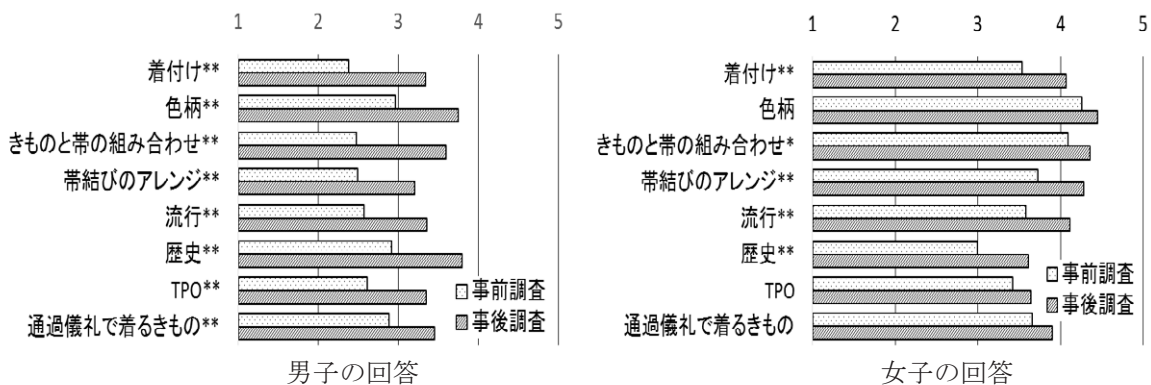


図5 「きもの」について、次のことに興味はありますか？の平均値 事前・事後調査の比較

### 3-7 きものの良さに対する気づき

#### (1) 1時間目終了時の調査結果（ワークシート①）

「きものの良さ」に関する記述583件を検討すると（図6）、1時間目には『色柄』173件、『印象』114件、『機能性』86件、『自己表現』63件に関する記述が多く、『色柄』に関する記述としては色柄の多様性に関する記述が目立った。柄については「願いが込められている」「現代風の柄もあっておしゃれ」といった、洋服とは異なるきものの柄の特徴を挙げる生徒も多くみられた。また、「きれい・大人っぽい」といったきものの『印象』をきものの良さとして捉えている生徒も多かった。さらに、「色や模様などを変えたりすると、自分なりの個性が出る」と気づいた生徒が多かった。これは、ゆかたに触れたり羽織ったりする学習活動を取り入れたことにより、きもの特徴を考える際にゆかたの色柄によって着ている人の印象が変わることを生徒たちに分かりやすく示すことが

できたためと考えられる。『機能性』に関する記述では、学習活動をふまえ、「想像していたより簡単に着られる」「折り目もあって簡単にたたむことができる」「風通しが良い」の3点に関する記述が多く、たたみ方に関連して、「平らになるのでしまうのに便利」「かさばらない」等の利便性についても記されていた。

「日本独自の文化」「昔から伝わるもの」等『日本文化』に関する記述が68件となった。中には「日本文化を外国に伝える良い品」というような海外にも誇れる日本文化であると捉えている生徒もみられた。『祝い事』に関する記述54件では、きものは普段あまり着用しない特別なもの、そしてそのきものを着用する場面も特別な式やイベントと捉えられていることが分かった。しかし同時に、その特別であることがきものの良さでもあると感じていた。

## (2) 2・3時間目授業終了時の調査結果（ワークシート②）

2・3時間目授業終了時に、「きものを着ることで、どのようなよさがあるのか、考えて書いてみよう」についての自由記述は総数499件で、(1)と同様に分類すると『日本文化』207件、『印象』70件、『気持ち』57件、『祝い事』52件、『色柄』36件、『機能性』33件、『自己表現』32件、『その他』12件であった。結果を図6に示した。『日本文化』に関する記述が最大となり事前調査の3倍に増加した。内容的にも、きものを「日本独自の文化」ととらえた事前調査の記述から「受け継がれてきた」ものという身近な文化としてとらえた記述が40件となり、次いで「受け継いでいく」が27件、「広める・大切にする」が9件、「海外発信」が7件他で、多くの生徒はきものが日本の伝統衣装として現在まで受け継がれてきたことを認識し、きものが海外にも誇れる日本文化であると捉えている生徒もみられた。しかし、その受け継がれてきたものを「受け継いで行く」という意欲的な気持ちを抱いている生徒は少なかった。古くから受け継がれてきたきものを今度は自分たちが未来に受け継ぎ残して行こうという意欲的な気持ちを生徒たちに芽生えさせることは重要な課題である。

次に多くみられた『印象』に関する記述では「華やか」なだけでなく「大人っぽく」「きっちりしている」印象を与えてくれることも、「きものの良さ」だと感じていた。『気持ち』に関する記述からは「楽しい・ワクワクする等」ゆかたを着装することにより高揚感とともに「心が引き締まる」

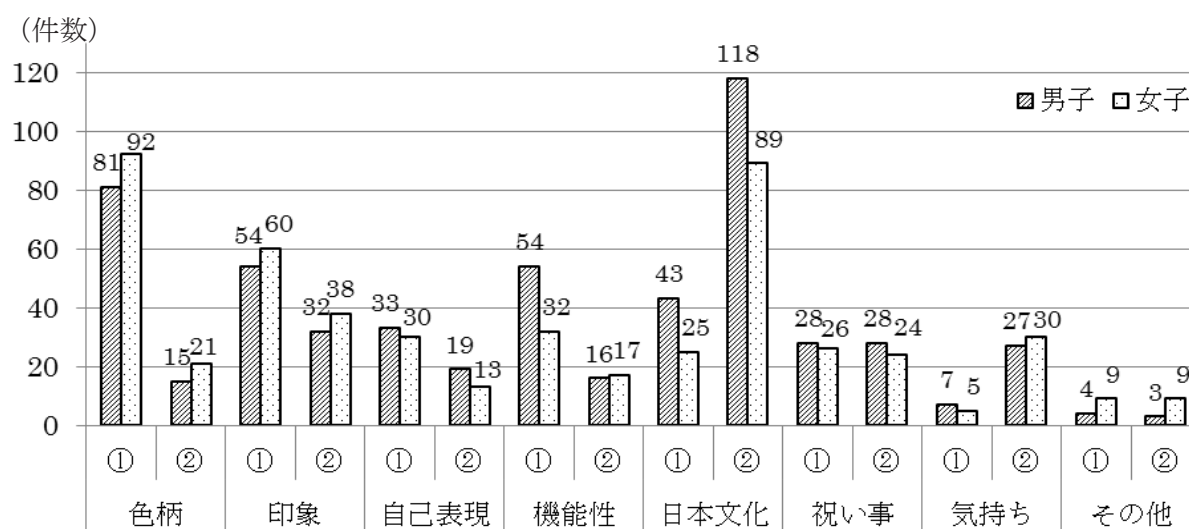


図6 きものの良さの記述内容件数 事前調査①と事後調査②の比較



「落ち着く」といった気持ちの変化を感じていた。着装体験によって、自分自身や友達の印象が変化すること、普段とは違う気持ちを抱けること、気持ちの高まりを感じていること等が「きものの良さ」の記述からも読み取れる。

『祝い事』に関する記述では「人生の節目・特別な時・めでたい時」や、「通過儀礼」に着目した授業であったため成人式や結婚式で着用するという記述が多くみられ、節目できものを着用することにより「自分の成長を実感できる」といった記述もみられた。『機能性』に関する記述は「涼しい」の記述が20件と最も多く、着装実習を経たことで着用時の涼しさまたは涼しそうと肯定的に感じていることが分かった。『色柄』『自己表現』に関する記述では、自分の好きな色柄や自分に似合う色柄のきものや帯を選択することで、自分らしさや個性を出すことができ自己表現にもつながるという記述が多く自分自身のこととしてとらえていた。これはゆかたの着装実習にカラーコーディネート学習を取り入れた効果よるものと考えられる。

#### 4. まとめ

生徒たちは七五三以後きものに袖を通しておらず、温泉・祭り・花火大会などでゆかたに馴染んでいる程度である。将来を見据えた成人式・結婚式で着てみたい衣装の調査では、成人式における女子の「振袖」以外は男女ともに洋装を希望する回答が多く、また、生徒のきものに対する興味関心も高くはなかった。きものについてのイメージや知っていることの記述からは、「着用場面・場所」「伝統・歴史」に関して単語・短文で記載されることが多く、内容は浅いものであった。着付けやきものの価格、動きにくい・暑い等の機能面に対し、マイナスのイメージを抱いていることが分かった。このような現状から、きもの文化を伝え大切にしていく意識を育む学習を取り入れていくことは意義があるといえる。

授業の中で最も印象に残っている内容は「ゆかたの着装」で、体験的な学習活動は印象深く、次いで「文様」「七五三・成人式・結婚式で着用するきもの」となり、実物やスライド資料を多用し、視覚的に分かりやすくしたことや、中学生にも馴染みのある着用場面を提示した効果といえる。

ゆかたの着装実習に対する感想では「着装時の気持ち・印象」に関する記述が最も多く、男子に比べ女子の方がゆかた着装時に楽しさや高揚感を感じており、楽しさを味わわせる点で効果的と考える。「難易度・出来栄え・理解」に関しては男女ともに「帯」の記述が多かった。

成人式・結婚式で着てみたい衣装については、男子は「スーツ・タキシード」の回答が高いものの、事後調査では成人式で女子は9割に近い生徒が「振袖」を選択し、結婚式では男子の約4割が「紋付羽織袴」を選択した。授業を通して、きものについての知識を得たこと、きものは日本独自の伝統衣装という認識が強められたことで「自分も着てみたい」という肯定的な気持ちの変化がみられたと考える。きものへの興味関心については、事後調査では男女ともに、全ての項目で興味関心が高まり、男子は女子以上の向上がみられた。

「きものの良さ」に対する記述に関しては、1時間目終了の段階では、印象や色柄・自己表現に関する記述が多くみられた。ゆかたに触れたり羽織ったりする学習活動を取り入れたことにより、着ている人の印象が変わることを実感し、「色や文様などを変えたりすると、自分の個性を出せる」と気付いた生徒も多かった。3時間目の終わりには日本文化に関する記述が多くみられた。「日本の伝統を受け継いでいる」といった内容が多く、きものが海外にも誇れる日本文化であると捉えていた。これらの記述からも着装実習によってきものをより身近なものとしてとらえることができた

ことが伺えた。

以上のように、生徒たちは通過儀礼で着用されるきものの学習や着付けを体験することで、日本文化に関連づけてきものの良さを感じ、知識・興味関心を向上させるとともに、着用に対する肯定的な気持ちを持つことが明らかとなった。「きものの良さ」に対する記述には、印象や色柄・自己表現に関する記述の他、日本文化に関する記述が多くみられ、これは、ゆかたの着装のみならず実物を見たりきもの文化全般に目を向けた学習内容を取り入れた授業内容との関連が認められた。今後は、受け継がれてきたきものを「受け継いで行く」という、積極的な気持ちにつなげていけるような授業内容を検討していきたい。

本研究の一部は、平成25・26年度東京学芸大学連合大学院教員プロジェクト研究の助成を得て行ったものである。本報告は、平成26年11月日本衣服学会第66回年次大会（於東京学芸大学）の発表内容に加筆したものである。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省；中学校学習指導要領解説 技術・家庭編、59-60 (2008)
- 2) 鹿児島県総合教育センター；和服の基本的な着装を取り入れた学習指導の在り方 指導資料 技術・家庭 (家庭)、34 (通巻第1620号)、1-4 (2009)
- 3) 清田礼子；家庭科における伝統や文化を尊重する態度を育てる効果的な授業の在り方—日本の伝統的な和服のよさについて学ぶ学習を通して—、山梨県総合教育センター (2010)
- 4) 薩本弥生他；きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践—教育学部の大學生アシスタントティーチャー (AT) を活用した試みから—、横浜国立大学 教育デザイン研究、第4号、35-44 (2013)
- 5) 川端博子他；ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み、日本家庭科教育学会誌、56(2)、78-89(2013)
- 6) 川端博子他；文化の伝承を手がかりとする衣生活学習への試み—ゆかたの着装を題材とした教育プログラムの検討—、埼玉大学紀要 教育学部、62(2)、67-81 (2013)
- 7) 扇澤美千子他；きものの良さを味わう教育プログラムの提案—通過儀礼に着目した公立中学校での授業実践報告—、茨城キリスト教大学紀要 49、23-36 (2015)

(2016年3月29日提出)

(2016年5月10日受理)

# Lesson Practice focused on Rites of Passage Effects on Junior High School Students towards Consciousness for Kimono

**OUGIZAWA, Michiko**

College of Life Science, Ibaraki Christian University

**KAWABATA, Hiroko NAGASAKI, Shoko**

Faculty of Education, Saitama University

**ISHIKAWA, Atsuko**

Tsuchiai Junior High School, Saitama City

**ITO, Taiga**

Computer Centre, Gakushuin University

**ABE, Eiko**

Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

**SATSUMOTO, Yayoi**

College of Education and Human Sciences, Yokohama National University

## Abstract

We practiced lessons (3 classroom periods) on Kimono in public junior high schools focusing on the rites of passage. The purposes of the lessons were to improve knowledge and interest and to enhance feeling of familiarity towards Kimono amongst the students. We conducted preliminary surveys and post-surveys on 312 students in the first year of junior high school, and analyzed the results from the questionnaires and worksheets.

As a result, we confirmed the following.

The students lacked interest in and knew little of Kimono prior to the lessons. By studying Kimono in connection with the rites of passage and actually experiencing the act of wearing the Yukata, students were able to appreciate Kimono in association with their life and culture and uplift their feelings towards wearing it while also improving their knowledge and interest.

In future lessons, we hope to provide contents that can lead students to be further positive and come to feel responsible to pass on this inherited tradition.

**Key words:** the rites of passage, consciousness for the Kimono, public junior high school, traditional Japanese culture, wearing of the Yukata